
超運命決断決戦GCP!ファナティック・ジャンケン!!

500 \$

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超運命決断決戦GCP！ファナティック・ジャンケン！！

【Nコード】

N2544Z

【作者名】

500\$

【あらすじ】

習作です。

剣と魔法の世界。終わらない戦争を憂いた二つの国は、『ある儀式』を用いて戦争を終結させようとする。

その先に何が待っているのかも知らずー！。

プロローグ

――こことは違う、どこか遠くの剣と魔法の世界のお話。

「世界にひとつの大陸」は長きに渡る紛争の中にあつた。

一方はビッグシエル大帝国、大陸のほぼすべての国家を統一した、武力も人口も最大の国家。

もう一方は魔法王国ジオディア、人ならざる魔物、魔族、そして数々の強力凶悪な魔法使いを擁し、それらを統べる魔王が統治する、大陸の空に浮かんだ島々であつた。

数百年に及ぶ長い、長い戦い――人々は減り続け、作物は育たず、戦場は増え続け、死体から溢れだす死の病――。

世界は、人々は疲弊していた。それは人間にとっても魔族にとっても同じ事であつた。

2

そこで時のビッグシエル大帝国皇帝「ベルゲン8世」は一計を案じる。

これ以上誰も苦しませず、平和な世界を作り上げるために――。

*

「魔王様――！魔王様あああ――！」

ジオディア本島、魔王宮。

現在のジオディアを治める魔王「アトモス」の住まう場所にして、ジオディアの議会や経済などの全てを管理する、この国の心臓部だ。その魔王宮にあるアトモスの執務室に、半人半竜――深緑色の鱗に

皮膚を覆われた、竜の顔と背中に翼を持った大臣が、慌てて駆け込んできたのだった。

「やあ竜爺、そんなに慌ててどうしたんよ」

と、片手を揚げた魔王様はフランクに、書いていた書類から顔をあげ、大臣に挨拶した。

「どうしたもこうしたもございませぬ！これを御覧ください！」

「？」

ごそごそと大臣は懐から小さな封筒を取り出すと、荒ぶる息を整えて声を絞り出した。

「ビッグシエル皇帝から直接の、封書でございます……！」

「マジで？ちょうやべえじゃん」

*

――この物語は、二つの国の存亡を賭けた、誇り高き戦いの記録である。

*

――数週間後、「語り部の森」と呼ばれる大陸内の不可侵中立地域、

その中心に程近い「語り部の村」の広場に、魔王たちはいた。

魔王のそばにいるのは、仮にも一国の元首を護衛するには余りにも少なすぎる4人。

ひとりには真つ黒な鎧で全身を固めた禍々しい騎士。・・・が、その中身は空っぽ。いわゆる「鎧のモンスター」である。

ひとりには筋骨隆々、魔王の2倍近い巨軀に、黄色の体毛とオレンジの「たてがみ」が美しい、虎の顔をした男だ。

もうひとりには黒と白のマーブル模様があんまり目にやさしくないローブに身を包んだ、小柄な魔法使い。

そして最後のひとは銀髪紅眼に黒を貴重とした豪華なドレスを纏った妖魔族の女性だ。

彼らは「今回の事案」に必要な人員として、ジオディア各所から集められた少数精鋭——その道のスペシャリストだ。

その選定には20日もの時間を費やし、ジオディアを出る前日まで人員が確定しないほど、ハイレベルな選定が行われていたのだった。

「・・・いまさらの話でアレなんじゃが。ホントに魔王様が直々に出向いてよかったのかのう。影武者とかで良かったんじゃないかの」

口を開いたのは妖魔族の女性だ。

彼女の名はシェリンドンといい、ジオディアでも強大な魔力を持つ「妖魔族」の代表であり、ジオディア議会元老院の構成メンバーのひとりでもある。

若々しい外見とは裏腹に、年齢は800歳を超えろという生粋の長命種だ。

「なんでよ?」

魔王様は首をかしげる。

「例えばじゃ。ここに呼び出された魔王様が、いきなり後ろから刺されたりとかしたらな、ジオディアの奴らはどうすればいいのじゃ」

「さすがにここまで来てそれはないんじゃないかね？」

「いやな、だって相手は今まで血で血を洗う戦争をしておった人間どもじゃぞ？いきなりこんな正々堂々とした手段をとってくるなんてことは、ワシにはどうしても思えんのじゃ」

「まあそりゃ、われだって最初は疑ったさ。でも決戦の場所がこの語り部の森で、決戦方法がアレだっていうぐらいなんだから、これはもう騙す気はないなって思ったんだよ」

「そんな簡単に信じていいんかのう」

「平和への第一歩は、お互いを信用しあうことだって。あっちも平和的な解決を望んでたって事じゃん？」

ジオディアは空中に浮かんだ島々からなる国家だ。その性質上、どうしても資源や土地に限界がある。ゆえに資源を求めて十数代前の魔王が地上に対して侵略戦争を始めたのが、この長きに渡る戦争の発端であった。

しかしここ数十年、ついに戦争資源すら枯渇し敗色の色が濃厚になるにつれて、国内にも停戦派や降伏派などの派閥が勢力を強めることになり、国民の基本意識が根本から変化しつつある。

そこで白羽の矢が立ったのが現在の魔王、アトモスであった。

魔王アトモスは力押し一辺倒の前魔王の政治とは違い、即位当初から経済、環境、外交をなんとか立て直すという方針を固めており、

その姿勢をジオディアの民は支持している。

あくまでも戦争に関しては「こちらから手出しはしない」という程度の中立意識ではあったのだが、民衆の支持を得たい停戦派や降伏派はここぞとばかりに魔王を自らの派閥に取り込もうと目論んでいるのだった。

「なんにせよ、今回の一件で終わってくれればそれがベスト。無理なら無理でしかたない。そういう感じでいいよ」

「その通り」

同意したのは虎男、名をアイグルという。

「長きに渡る戦争で、俺達の家族が何万と命を奪われてきた。それを恨まず、すべてなかったことにするなどという事は、俺にはとても出来ない。しかし、それは人間共とて同じだろう。奴らも同じく家族を、友人を失っているはずだ。きつと奴らもこのまま戦いを続けることがいかに不毛かということが解かったのである。俺はそう信じたい」

うんうん、と頷いたのはマーブルローブの魔法使い。

「そーそー。虎のおっさんは話がわかるよねー！ワタシはもう正直な話、地上の魔法学院とか研究機関とか、そういうのに協力したほうが、絶対にジオディアは発展すると思うんだー」

魔法使いの名前はローブの模様と同じくマーブル。彼女はジオディア魔法開発機構に所属するエリートで、日夜、新しい魔法を編み出すための研究をしている。

「おっさん……」

敵つい顔面をしている割にアイグルは種族的にはまだまだ若い年齢だったので、「おっさん」という言われ慣れない呼称で呼ばれたことに肩を落とす。

「ん？ おっさん？」

「い、いやなんでもない。しかし遅いな。ビッグシエルの精鋭どもビッグシエル皇帝から送られた手紙に記された決戦の日は今日だ。その割には、集場所として決められたこの語り部の村の広場は、魔王たちジオディアの一团以外では村人がぼつぼつと居る程度で、今からビッグシエルという大国の王族がここに来る、という雰囲気はまるで無い。

……いや、そのビッグシエルと戦争継続中のジオディアの魔王がここにいることも普通に考えればおかしな話ではあるのだが、その事についても基本的に村人達はノーリアクションである。（もちろん虎顔の大男や全身甲冑の空気や汚いローブの子に対してもだ）

「……もし、ジオディアの方々」

と、集合時間が近づいても大して変化のない広場の一角で、ついに座りこみながらダラダラとくっちゃべっていたジオディアの精鋭たちに声を掛けたのは。

「おお、長老様」

この村の村長にして村の中で最高齢、御年97歳になるが、そこまですで老いを感じさせない（せいぜい見た目は50代〜60代前半程度

の（見た目の長老だ。

「語り部の森」にある「語り部の村」はその名の通り「語り部」と呼ばれる「歴史語り」を主とした吟遊詩人達の集まってできた村だ。その歴史は古く、ビッグシエルとジオディアの戦争が起こるよりずっと以前からこの村は存在しており、現在では両国間でも歴史的・文化的見地の関係上、語り部たちの生活圏であるこの森全域を不可侵の土地としている。

語り部の村では基本的に最高齢の人物（＝最も見聞と知識を蓄えた人物）が村の長となる。魔王たちはこの村に到着した3日前にすでに挨拶を済ませていたため、彼とは面識があった。

「決戦の場所まで御案内いたします。ついてきて下され……………」

*

「こちらです」

村はずれ。

村の末端は切り立った崖に面しており、言わば天然の防壁となっている。

その崖の一部に、明らかに人工的に切り抜かれた横穴があった。

「……………いかにも、という感じじゃな」

ヒュウ、とシエリンドンは薄く口を鳴らす。

「いいじゃんいいじゃん。雰囲気出てる」

「なんで魔王様は楽しそうなんだ」

「国の存亡をかけた戦いなんだけどねー、これが魔王様の本来のキヤラなんですよ」

そういうマーブルも、見た感じでは楽しそうな顔だ。

アイグルは小さくため息をつきながら、横穴ー洞窟を見やる。よくよく見れば洞窟の奥の方には小さく光が見える。それが炎や魔法などの人工的な光ではなく、一般的な太陽の光の色だと確認できたので、おそらく向こうは外、この洞窟はトンネルといったところだろう。

「……なあメールよ。さっきから何も喋ってないが、具合でも悪いのか」

アイグルは隣の黒い鎧に声をかける。ちらりと鎧が、その鉄仮面の中にぼう、と光る緑色の眼をアイグルに向けたが、すぐに目の前の洞窟に視線を戻す。

「問題無。行」

と小さく機械的な声を発したメールは、一行の先陣を切って洞窟に入る。

「うつしや、みんな行くぞ！」

「うむ」

「はい」

「了解だ」

魔王の号令で、それぞれが洞窟に入る。外からの見た目ほど洞窟の向こう側までの距離はなかったようで、程なくして一行は洞窟を抜けた。

「……なんじゃこりゃ」

その先に広がっていたのは広大な空間。ドーム状の施設のようで、湾曲した天井にはいくつもの穴が空き、そこから光の帯が流れ込んでいる。

「これは……魔王宮のホールぐらいの大きさじゃな。旧世代の遺跡のたぐいかのう」

「さようでございます。御麗人」

シェリンドンの疑問に答えたのは見知った顔ではない。一行の視線は、ドームの中央にある金網で仕切られたスペース、その中央にある台の上からこちらを見ている一人の男に注がれた。

「こんにちはジオディアの方々。遠路はるばる、この「決戦の闘技場」までようこそお越しくださいました。わたくしは今回の「儀式」を執り仕切らせて頂きます審判員」

くるり。と脱いだ帽子を優雅に回し、頭を下げる。

「ハイラルと申します。どうぞお見知り置きを」

「はい、よろしくー」

元気よくお返事したのはマールだ。

「アトラクション感覚か」

「おっさん、細かい事いわなくてもいいよー」

「おっさん……………」

「魔王様、見」

再び肩を落とすアイグルを尻目に、メイルは金網のスペースを指差す。

「あ」

そこには、やはりこちらと同じように5人の人間がおり（こちら側には人間でない者もいるが）、その中にはービッグシエル大帝国皇帝、ベルゲン8世の姿もあった。

*

「両陣営、揃いましたね」

ジオディアの一行が金網のスペースに入った事を見届けると、ハイルは深く息を吸い込み…………。

「それではこれより！ビッグシエル大帝国対魔法王国ジオディアの王、及び精鋭達による、運命決戦の儀式！」

「G！」

「C！」

「P！」

「ファナティイイックウ！ジャンケエエエエン！を！」

「これより開催いたしますうううううううううう！！！」

「皆様御一緒にい！」

「Good！（良く）」

「Choice！（選択された）」

「Pluck！（勇気を！」

両国の、世界の命運を決める「ファナティック・ジャンケン」の儀式の開始が、ここに宣言されたのだ。

ルール及び出場者

「「「「「「「うおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお！……！……！……！……！……！……！……！」」」」」

「「「「「「「GCP！GCP！GCP！GCP！GCP！」
「「「「「「「GCP！GCP！GCP！GCP！GCP！」
「「「「「「「GCP！GCP！GCP！GCP！GCP！」
「「「「「「「GCP！GCP！GCP！GCP！GCP！」

「な、なんじゃこの熱気は！？」

いつの間にやら、金網スペースの外にはもうひとつ金網が立ち上がっており、その外側、つまりドーム状のこの建物の外周全てが、熱狂的な語り部の一族たちによって埋め尽くされていた。

「ではこれよりルールの説明を行います。具体的にはこちらのリストを御確認ください」

- 1・基本にのつとつたジャンケンである。つまり、グーはチョキに勝ち、チョキはパーに勝ち、パーはチョキに勝つ。あいこに關しても基本と同じ。
- 2・両者が手を出すのは審判員の号令で行われる。自分のペースで行うことはできない。
- 3・儀式は1チーム5人で行わなくてはならない。5人の合計勝利数が多いほうが勝ちとなる。

- 4・対戦者2人は確実にジャンケンで決着をつけなければならない。お互いに暴力を振るうことを禁ずる。
- 5・試合後の互いのチームへの物言いは厳禁。先に突っかったほうのチームが強制的に負けとなる。
- 6・試合中に選手が死亡、もしくは試合を行えない状態に陥った場合、相手側の不戦勝となる。
- 7・試合中に公開
- 8・勝負の結果、最終的に審判員が勝利宣言を行い、勝ったほうの言い分を負けたほうが無意識にのみ込む魔法がかかる。

「御理解頂けましたでしょうか」

「続けてくれたまえ」

ハイラルに答えたのはビッグシエル皇帝・ベルゲン8世だ。口元にポリウムのある整えられた髭を蓄え、頭の上には王冠が載っており、いかにも王、という風体だ。

「それでは。補足として」

「1チームは先鋒、次方、中堅、副将、大将で構成されますが、便宣上のものとして、先鋒をポーン、次方をビショップ、中堅をナイト、副将をクイーン、大将をキングと呼びます」

「各自それぞれ、つまりポーンならポーンと、ビショップならビショップと戦い、勝った数が多いほうが勝者となります」

「今回であれば、勝者側は戦争に勝ったことになり、敗者側は敗戦国となります」

「皆様方はそれぞれに国民の信任を受けてこの儀式に臨まれたことと存じます。しかしながら、これを認められぬ方も少なからずおられるでしょう」

「そこで、今回はこのマジックアイテムを使用させていただく所存です」

ハイラルはどこからともなく、子供の頭程度の大きさのボール状の物体を取り出した。

マジックアイテムとは、失われた旧世代の技術で造られた、未知の機能を持つ道具の事だ。大陸の各地に散らばり、その目的や機能に關しても不明なものも多く、一種のレア・アイテムと化している。

「このマジックアイテムの名は『ソリッド・ステータス』。まずは起動してみましょう」

ポチリ、と、ハイラルがボール状物体の側面にある出っ張りを押し込む。

と、

「ッ!？」

目の前に突然、いくつもの文字が浮かび始めた。文字は何箇所かに集まり、文章を成していく。

「イベント：ファナティック・ジャンケン 現在開会式」と書かれたそれは左の方に消え、右側から流れてくる。

左上には「現在状態 ビッグシエル：0 vs 0：ジオディア」と書かれた文章が現れる。こちらは文章自体に動きはなく、・・・「視界の端」に固定されていた。

「御理解頂けましたでしょうか？これが「ソリッド・ステータス」の機能です。あらかじめ設定された文章を視界の中に直接映し出すマジックアイテムなのです」

「なにそれ、ちょうカツコいいじゃん・・・！」

「・・・なにが？」

眼を輝かせる魔王に対してのマーブルの軽いツッコミはスルーされた。

本筋とは関係ないが、魔王アトモスはマジックアイテムのコレクターとしてはかなりの有名人で、魔王宮の奥には数え切れないマジックアイテムが眠っている。

それらの名前と機能をひとつひとつ解説できる程に、魔王のマジックアイテムへの好奇心と愛着と執着は異状だった。

「それで、この機能を使うとなぜ国民の信用が得られるのだ」

若干イラついた感じに、ベルゲンは言う。いまだに金網スペース中央のお立ち台から降りてくる気配のないハイラルは、もったいぶったようにくるり、と横に1回転すると、ベルゲンを正面に見据えた。

「この文章は、ビッグシエルとジオディア両国の国民全員の視界に投影されています」

「なにそれ、ちょうカツコいいじゃん・・・！」

「・・・ほじ」

互いの国の代表者はそれぞれに感嘆の息を漏らす。

「つまりこの儀式・・・もとい決戦を、両国民はリアルタイムに感じることで、勝負の結果に納得してもらおう、ということですよ」

「ついでに言えば、負けた国に魔法をかけやすいということもあるんですがね」

「なにそれ、ちょうカツコいいじゃん・・・！」

「魔王様、いい加減手抜きだと思われてしまつからやめるのじゃ・・・」

「ええー」

ブーブーと拒否の構えの魔王様。これです。この人がジオディアの代表です。

「さて、それでは選手陣の紹介に移らせて頂きます。まずー」

「第一試合！ポーン戦！」

と、ここでドーム状「決戦の闘技場」が一気に暗くなる。天井が割れて光が入っているように見えたのは単なる映像だったようだ。ややこしいというか夢がないというか。

ついに真っ暗になってしまった中、ふたつの光線ー スポットライトが、ふたつの陣営から一人ずつを照らし出した。

「まずはビッグシエル大帝国側のポーン！その大斧に切り裂けぬものはないと国中で評判！帝国騎士団西方大隊！グライド！」

「うおおおおおおおっ！」

スポットライトに照らされた全身鎧の大男は、肩に担いでいた巨大な斧を自慢げに片手で振り回すと、あらん限りの力で吼える。

それに反応して、ドームの周りを囲む語り部たちも同じように「うおおおおおおお！」と叫んだ。

「そして魔法帝国ジオディア側のポーン！見た目は虎だが心は人間！タウラ空中諸島出身！自警団のアイグルだああ！！！」

「グルルラアアアアアアアアッ！」

「……わ、わああああ……」「」「」

アイグルもせつかくなので思いっきり吼えてみたが、観客の反応はイマイチな感じだ。

「……何故だ」

「ごめんケモノ過ぎて正直ひくわー」

「えっ」

魔王の正直な意見はまたひとつアイグルの心に深いキズを作った。虎のおっさんかわいそう。

「次！第二試合！ビショップ戦！」

ポーンの二人を照らしていたライトが離れ、それぞれがぐるりと闘

技場内を回転し、再び両陣営から二人を照らす。

「ビッグシエルのビショップは！西方地区ドラクロワの端のニフラの町在住！「気がついたらいつの間にか魔法が使えた」でお馴染みの！専門作家という名の無職！このあいだ久しぶりに家から出たサイモン・ローレット！」

にやあ、と無精ひげだらけの汚いかおを歪ませて、小太りの男は笑みを作った。

歓声は起きなかった。

歓声は、起きなかった。

歓声は、起きなかった。

「なん・・・だと・・・」

「落ち着くのじゃ、魔王様・・・！」

「これって荣誉ある戦いだよな！？お遊びじゃないよな！な！」

「そのはずじゃ・・・向こうはきつと実力主義なんじゃろつて・・・そうに違いない・・・そうに・・・」

魔王とシエリンドンはお互いの目を見ずに会話した。実際問題、辺りは真つ暗だから目の合わせようがないのだが、それも関係なしに何故か目を合わせたくなかった。

そんなギャラリー連中たちのテンションの低下を認めたのか、コホンとひとつ咳払いをして、ハイラルは続ける。

「ジオディア側のビショップは！グチャグチャ模様は正義のあかし！その魔法の杖で殴り倒した男は数知れず！叩き上げエリアルコン

まわりのギャラリィに右手を振りながら、ブレイズはジオディアの選手たちそれぞれに視線を動かしていく。

ポーン（のグライドと似たようなデザインの色違いの白銀の鎧（グライドのは浅緑）に身を包んだブレイズのその顔は、まさしく張り付いたような、としか表現できないような笑顔だった。

擬音で表すなら「ニコオ」とでもいったところか。

「そしてジオディア所属！こちらは魔王宮宮廷騎士団の切り込み隊長！中身はあるのか！？意志を持ったヨロイ、メイルだ！」

「……………」

「なんか言ったほうがいいんじゃないか、メイル」

「暗」

「……………そうだな。暗いな」

表情が読めない……というか、「顔」そのものがないので読みよ
うがないのだが、良く言えばマイペース、悪く言えば電波な性格に
いつもどおりアイグルは適当な相槌を返しておいた。

アイグルとメイルは旧知の仲だ。というのも、かつてタウラ空中諸
島、つまりアイグルが自警団員を勤める地域なのだが、この沖に
ビッグシエルの空挺団が侵攻してきたことにより、それを迎え撃つ
自警団との大規模な空中戦が展開された。

そのときに翼竜にまたがって最前線で戦っていたアイグル達に、魔
王宮から最速で駆けつけたのが、メイル率いる宮廷騎士団第3小隊、
通称「鉄砲玉」であった。

自警団のアイグルと宮廷騎士のメイルは互いの背中を預け、たった
二人で空挺団の母船を落としたのだがーそれはまた別の話。

ともかく、この二人はお互いを信じて共闘した、そんな仲なのだ。

スポットライトが移動する。ちなみにナイトの二人についてはパフオーマンズが少なかったのか、あまり歓声はあがらなかった。

「クイーン戦の第四試合！」

「ビッグシエルのクイーンはこの人！仮面の裏では何を考えてるかわからない！というかクイーン枠なのにこの配役はおかしい！変更すべきッ！仮面のジョーカー、ヴェドгентだ！」

「ウエピイー」

紹介が済むやいなや、ヴェドгентと呼ばれた子男は、ジャンプして空中回転、そこから片手倒立を決めるというアクロバットな拳動を、何の苦もなく成功させた。ジョーカー、道化師というよりは、むしろ軽業師や大道芸人というべきなのかもしれない。

さきほどまでとは別種の歓声上がる。それは熱狂というよりも感嘆と言った類のもので、一見ただけで凄いとわかる動きを見せたヴェトгентへの賞賛のようなものだった。

「なにそれ、ちょうカッコいいじゃん……！」

「もう魔王様はちょっと黙っとれ……」

半ば諦め気味に、スポットライトに照らされながらシエリンドンは言う。

「そしてこちらはジオディアのクイーン！どう見てもクイーン！実年齢は秘密の妖魔族、超絶妖艶グラマラス美女のシエリンドン・口

強いタイプではなかった。

と、スポットライトの光がシェリンドンから移動し、再び会場を回り出した。こんどは勿体をつけるように、会場とハイラルのいるお立ち台、そしてそれぞれのメンバーの立っているスペースをぐるぐると照らすと、そのままベルゲンと魔王の二人を照らし出した。

「それではいよいよ各代表者、キングの紹介をさせていただきます。
・・・」

少し声のトーンを下げながらハイラルは言った。

「ホスト側、ビッグシエル大帝国皇帝、ルヴェルドⅡベルゲンⅧ世」

「そして魔法王国ジオディア最高責任者、魔王アトモス」

「両代表、決戦場へ！」

スポットライトの光が大きくなる。両陣営のスペースの間に掛かっていた「橋」と、その中心にある四角いスペースが照らし出される。スペースの名は「決戦場」。

ふたつの国の王は、それぞれに足を進める。まばゆく光る光線に照らされた決戦場で、ベルゲンと魔王は視線を交わす。

「お誘い頂き感謝します。ベルゲン帝。まさかこのような平和的な手段で戦争を終結させられるとは、われにも思いつきませんでした」

先に口を開いたのは魔王だ。

「こちらもだ。まさかジオディアがこのプランに乗るとは思わなか

った。双方が終戦を望んでいたとは、喜ばしいことだ」

「しかし、勝った負けたは決めたい。そういう事ですよね？」

「いかにも。我々として、諸君らに殺された者達の恨みがある。それらを蔑ろにするわけにはいかぬ」

「こちらですよ、ベルゲン帝。あなたたちに潰された臣民やその家族のためにも」

「勝つのはこちらだ」

パン！と、大きな破裂音を響かせ、二人の間に力いっぱい握手が交わされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2544z/>

超運命決断決戦GCP!ファナティック・ジャンケン!!

2011年12月9日01時07分発行